

令和6年度第2回三条市総合計画協議会 会議録（概要）

●開催日時及び場所

日時 令和6年11月22日（金）午後2時～3時45分

場所 三条市役所 第二庁舎301会議室

●出席委員（◎会長 ○副会長）（25人）

淵岡 優介	味田 麻里	横田 茂幸	佐藤 隆司
内山 清	古川 裕之	竹内 俊哉	大西 朗
田中 好	土田 初	布施 栄一	◎宍戸 邦久
堀 善一	○兼古 耕一	佐藤 栄	佐々木 重信
石塚 久雄	木下 久美子	高波 靖子	長谷川 正樹
宮内 和則			

（オンライン）

平澤 則子	長尾 雅信	溝口 由己	石塚 千賀子
-------	-------	-------	--------

（欠席委員）（4人）

安達 英作	山田 彫子	佐藤 洋一	関 奈緒
-------	-------	-------	------

●出席者

総務部長	本間 一成	市民部長	長谷川 考基
福祉保健部長	村上 正彦	経済部長	片野 義孝
建設部長	三卷 正志	教育部長	平岡 義規
消防長	坂井 幸雄		
政策推進課長	石塚 衛	課長補佐	石黒 美保子
政策推進係長	横山 優樹	主査	五十嵐 装子
主任	高野 久美子	主任	丸山 真
主任	大滝 雄斗		

●傍聴者

なし

●報道機関

なし

●内容

1 開会（午後2時）

2 議事

(1) 行政評価に基づく令和6年度中間報告について

(石塚政策推進課長 説明)

資料No.1 「令和6年度行政評価中間報告総括表」

資料No.2 「令和6年度行政評価中間報告シート」

資料No.3 「令和6年度第1回三条市総合計画協議会後に御提出いただいた御意見  
及び御欠席委員からの御意見」

～質疑～

(横田委員)

まず、「第5章 住み良い地域づくり」の「第1節 生活環境の整備」のデマンド交通の利用者ということで、免許を返納する方が、三条市では何もメリットがない。燕市や長岡市では、何か交通の補助をいただけるという声がある。三条市も少し何か考えていただきたい。デマンド交通は、非常に不便という声があるが、今後、ライドシェアについて考えているか。

(長谷川市民部長)

デマンド交通に関して、免許返納に対し何か特典をとということについては、現在のところ、免許返納された方に対して、デマンド交通の「おでかけパス」というものがあり、それに対する料金を1年間無料にするという制度を行っているところである。

また、デマンド交通が不便であるという御指摘については、不便とは何を指しているのか。

(横田委員)

玄関まで来てもらえないとか、乗る場所が離れているということで不便を感じているという声を聞いている。

(長谷川市民部長)

デマンド交通自体が、皆様も御存知かと思うが、通常の路線バスとドア to ドアのタクシーの中間のサービスで、地域に停留所を設けて、そこから乗ってもらうという趣旨で整備したところである。家まで来てもらえないということの不便を感じていらっしゃるということは、私共も承知しているところである。しかし、公共交通という考え方で整理しているため、御理解いただけたらと思う。

もう一つのライドシェアについては、今、本当に様々なメディア等で取り上げられていることを承知しているが、日本版のライドシェアについては、タクシー業者等が行うライドシェアとなっており、当市においては、今のところ方向性は出ていない。

御存知かと思うが、県内では、新潟市が始められたという状況があり、今後は、拡大の方向などを注視してまいりたい。

(長谷川委員)

資料No.2の33ページと34ページに関して、質問と意見がある。皆さんも御存知かと思うが、三条市が2005年に合併した時に、人口は105,000人ほどいたが、現在では91,000人ほどに減ってしまった。今後もこういうことが、恐らく続くだろうと思われるが、人口の自然増加はかなり厳しいと感じていて、そうすると人口の社会増加の方に期待をかけるということになると思う。そこで、34ページに出ているが、小項目2の「移住、定住の促進」、小項目3の「地域の担い手の確保」ということが、大事になってくると思っている。

いずれもA評価で良かったと感じるが、少し気になることは、小項目3の成果指標にある下田地域への移住者数について、令和5年度が36人、令和6年9月30日時点では46人と出ているが、このうち、地域おこし協力隊員の数は、それぞれ何人ずつになるか。

(長谷川市民部長)

地域おこし協力隊員の数は、これは累計となっているので御注意いただきたいところであるが、令和5年度の36人のうち地域おこし協力隊員は、25人となっている。

また、令和6年9月30日時点の46人のうち、現時点で、地域おこし協力隊員は21人となっている。

(長谷川委員)

地域おこし協力隊員は、私には少し身近ではなくて、総務省のホームページを見たところでは、『「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る取組』と出ている。市の説明においても定住の促進と出ているので、当然、下田地域の25人の方、今年の21人の方に関しても、定住を促したいと思っているが、任期は1年以上3年未満であったか。3年後、どのくらいの人たちが残っているのだろうかと思って、前回は質問した。

3年後に残ってくれた方が、その後も三条市に、どれくらい残ってくれるのだろうかということも、とても大事なことだと思って質問したところ、資料No.3の4ページにおいて、市役所からの返事が書いてあった。私が少し残念に思ったのが、「一定年数を経た後の定住状況は、個人の諸事情が大きく関わることから継続的な追跡調査は行っていない。」という返事であった。

私はこれで良いのかと思っていて、3年後のことは把握されているが、更に3年後、更に5年後、10年後が全く分からないということになる。これで定住促進というのは、どうなのかと思う。やはり、継続的な追加調査をするべきではないかと思う。個人の

諸事情が大きく関わるということはよく分かる。それぞれの事情は確かであろうが、だからといって、その後の追跡調査がなければ、何が残っているだろうかということも、三条市を離れている人がどのような理由なのかが、分からなくなってしまう。

個々の諸事情をデータとして蓄積していくことによって、もしかしたら、似たようなパターンだとか、似たようなケースだとか分かれば、いろいろと対処ができるようになるのではないかという気がする。個々の諸事情のデータを積み重ねていけば、何かそこに共通点が見えてくるかもしれない。あるいは、一般法則が出てくるかもしれない。そういう意味で、個々の諸事情が違うからという理由で、追跡調査をしないというのは、定住の促進という意味でやはり良くないのではないかと私は思うが、市としてどうお考えか。

(長谷川市民部長)

資料に個人の諸事情と記載させていただいているが、基本的には隊員の任期満了後、どちらに行かれるのかということは、私共ではコントロールできない部分である。「よろしければ、このまま三条市に住んでいただきたい。」ということ強くお話をさせていただきながら、隊員の任期期間中には、三条市を好きになってそのまま住んでもらうということが市としての考え方である。

ただ、任期満了後、活動していた地域にいるのか、市内の別の所に引っ越しされるのか、市内に住んだ後であっても転出するのか、いろいろなケースがある。長谷川委員からお話があったような「どこまで追えるか。」ということは、私共でもやったことがないので分からないが、一つの御意見として賜りながら、それが有効なのかどうかも含めて検討してまいりたい。

(長谷川委員)

地域協力隊というのが、定住・定着を図る取組であると総務省も言っているので、せっかく3年経って残ってくれたという人たちのことを大事にするという意味においても、追跡調査をどこまでやるのかも検討していただいて、下田地域は人口減少が大変そうなので、是非、その辺のところを前向きに検討していただきたいと思っているが、いかがか。

(長谷川市民部長)

隊員の個々の諸事情もあって、個人の理由に触れるところは、なかなか難しいかと思う。できるかどうかという判断は、即答できないが、検討していきたいと考えている。

(高波委員)

除雪車についてお願いがあり、意見させていただきたい。除雪車は、生活に必須なもので本当に感謝しているが、今年の大雪の際に子どもが小学校に行く時に、私が付

き添った。ちょうど除雪車が、通学時間に重なってしまった。

その時の除雪車は、狭い通学路にやってきて、減速してくれなかった。私は、普段学校の周りを運転していて、子どもが歩いている時には、これでもかというぐらい減速する。子どもは飛び出すし、転ぶかもしれない。狭い道路を除雪車が走ってきたので、怖くて、端っこに寄って「危ないよ。除雪車が来るよ。」と声を張り上げていた。

お願いしたいのは、子どもの通学時間と除雪車が通る時間をずらすことはできないかと思って、お話を伺いたい。

(三巻建設部長)

今ほどの件、大変申し訳ございませんでした。道路除雪は、いろいろな種類があるが、基本的には通勤前等に終わらせるという形で、委託業者には周知をしている。

(高波委員)

通勤前というのは、具体的に何時くらいか。

(三巻建設部長)

7時、8時頃だと思う。

(高波委員)

通学時間が、だいたい7時50分とか8時まで、学校に子どもたちが着くようにしている。

(三巻建設部長)

それより前には終わらせるようにとしているが、雪の降り方によっては、例えば、急に朝方降った場合には、そこから出動したりするので、どうしても遅れて、通勤・通学時間にまだ動いている場合もある。また、大雪になったときには、除雪に手間取って、通勤・通学時間にかかるときもあるが、基本的には、そういった所に迷惑がからないように委託業者にはお願いをしている。

やむを得ず遅れて、通勤・通学時間にかかる場合は、歩行者への配慮というのは当然するものと思っているため、改めて各業者には、こういったことを注意するようにしっかりと伝えてまいりたい。

(堀委員)

資料No.1の10ページの児童虐待管理の終結率と障がい者虐待管理の終結率が、ともに目標値に対して非常に低い数字でC評価となっているが、全く何もしてないというわけではないかと思う。

資料の概要欄にも、「差別の疑いを含む相談件数は増加傾向にあり」というように記載され、そのとおりのだろうと思うが、それぞれ何件くらい把握されていて、終結していないが継続して対応しているという件数は、どのくらいあるのかというところを分かれば、お聞かせ願いたい。

(平岡教育部長)

私からは、児童虐待の終結率が8.5パーセントとお示ししているこの点について、お話をさせていただきたい。現在の虐待管理件数は、虐待があったと確認した件数であるが、令和5年度には、171件の虐待について対応している。主には、ネグレクトであったり、子どもへの心理的虐待であったり、身体的虐待というものがその内訳として確認している。

終結率については、非常に低い割合であるが、近年、虐待件数というのは増えており、終結させる数に対して増えていく数が非常に多い。来年度は、目標達成ができるように、引き続き、鋭意注力してまいりたい。

(村上福祉保健部長)

障がい者虐待管理の終結率の件でお答えさせていただくと、障がい者虐待は、上半期の状況であるが、昨年度からの引継ぎが2件、今年度虐待管理を開始したものが3件の計5件となっている。

終結目前のケースが2件であり、残りの3件については、養護者や家庭において複合的な課題を抱えていて、終結に向けての環境調整に時間を要しているところである。現在管理中のものは、年度末までに終結できるように関係機関と連携を図りながら現在取り組んでいるところである。

(堀委員)

それぞれ全て相談に当たっているということか。対応は、100パーセントということと考えてよろしいか。

(平岡教育部長)

児童虐待についての対応は、100パーセント、しっかりできる限りの対応をさせていただいている。

(村上福祉保健部長)

障がい者虐待においても、把握している5件については、全て対応しているというところである。

(古川委員)

資料No.1の1ページにある部活動の地域移行というところで、令和5年度、令和6年度と、順調に、休日移行ということで試験的にやっているところである。ソフトテニスは協議中ということだが、来年度には、残りの3競技についても、教育委員会、スポーツ振興室、我々スポーツ協会で一生懸命協議しているところであるということ報告したい。

これはお願いであるが、まだ、いまだに部活動の地域移行に関して、生徒はもちろん、保護者も、学校の先生方も、なかなか認識が統一されていないのかなと、案内が

周知徹底されていないのかなというところがある。現在、中学校で部活動を一生懸命やっている子についても、「部活動の地域移行とは、どういうことなのか。」といったように、なかなか、その認識がまちまちというところもある。

丁寧に御説明していただいているところもあるが、例えば、来年中学校にあがる小学校6年生、再来年あがる小学校5年生、子どもたち、保護者に対して、分かりやすい丁寧な御説明を続けていっていただければ、恐らくこの数字が上がってくるのではないかというところで、そのお願いである。

(宍戸会長)

私からで申し訳ないが、認識がまちまちということであったが、どのようなところで、まちまちが起きているのか。

(古川委員)

私が聞いているところだけであるが、各中学校の先生方によっては、この地域移行に関する考え方がまちまちであったりする。ここに参加するとかしないとかということも含めてであるが、そのようなところもある。

例えば、中学校の先生が、「この休日移行には、私たち中学校の〇〇部は関わらない。」という方もおられる。これは、国の政策でやっているわけであって、それに伴って、付随して私たちも動いているが、その辺りがずれていると感じる。

移行期間中であるため、当然、登場人物や関係者も多くおられるので、なかなか統一することは難しいとは思いますが、その方向性だけは、しっかりと示していただければというところである。

(平岡教育部長)

部活動の地域移行については、以前にも、学校はもちろんのこと、子どもたち、保護者に対しアナウンスしていく必要があるという御意見をいただいた。その中で取組を始めたのが、「地域クラブ活動通信」である。vol. 2まで出ているが、そうしたことで、子どもたち、保護者への周知浸透を図っている。

学校の先生方には、毎月全校長が集まる校長会議において、部活動の地域移行の取組について進捗状況あるいは課題、そういうものを周知することで学校への浸透を図っていただいている。引き続き、こうした機会を前提に考えてまいりたい。

(宮内委員)

資料No.1の1ページのNRTの偏差値のところ、特に②の中学生のところであるが、実績値が目標値に対して偏差値3.6ポイントも低い。資料No.2の4ページには、前年度の実績値も書いてあるが、年々、偏差値が下がっている。

三条の将来を支える子どもたちの学力が下がっていると捉えたとするのであれば、こういう傾向は、どういうところに要因があるのか。また、この地域全体が、下がる

傾向にあるのか。新潟県の中で三条市だけが下がっているのか。その分析をどう捉えていて、どう対策していくのか。

対策の中に、ICT活用と書いてあるが、本当にそういうもので良いのかどうか。本質的なところで、学力の低下に対してどう認識をもたれていて、どのような取組をされようとしているのか、その辺を教えてください。

(平岡教育部長)

学力が目標値に達しないということに対して、教育委員会としても非常に重く受け止めており、可能な取組を様々に展開しているところである。現場で考えられる要因は様々あるが、特に注力していかなければいけないものとして、アンダーアチーバーと呼ばれるものがある。

基本的な能力はあるものの、なかなか勉強に向かい合わないというようなお子さんがいらっしゃる。そういうお子さんに対して、より楽しい授業であったり、注目を引く授業であったりをどう展開していったらよいのかといったところにも注力しているところである。

学力については、平均でお示ししているが、学校によって様々である。学校において、できる限り、学校、クラスに合わせた取組を学校で検討し、それぞれが展開しているところである。数か月取組を進めてきた中で先日行われた学園長会議においてもこれを議題として取り上げ、各学校の取組を共有し、今後更にどういう取組が必要かというヒントを持ち合わせながら、それぞれ今後の取組に生かしていくこととなっている。引き続き、注力してまいりたい。

(宮内委員)

県内の中で三条市の実績の位置付けは、いかがか。

(平岡教育部長)

県内の中でどれくらいなのか、隣の市と比べてどうかというところについては、控えさせていただいている。

これは、あくまでも、子どもたちの偏差値がどれくらいあるのかということのを参考にしつつ、その後の授業展開に生かしていくという資料としており、これが競争を煽るような指標になりえないように取り組んでいるため、御理解願いたい。

(宮内委員)

偏差値 50 を切るということは、相当な危機感をもって取り組んでいらっしゃると思うので、よろしく願いたい。

(竹内委員)

2点について、それぞれの立場で、農業の面と観光の八十里越の面について、お話をさせていただきたい。

まず、八十里越のコンテンツ創出では、4件でC評価ということである。八十里越のセミナーは、全てではないが参加させていただいており感じたものがある。そもそも八十里越の入口にある下田地域でいうと、プレイヤーがとても少ない。コンテンツ創出についてのセミナーを行っているが、結果的にプレイヤーが少ないというのもあるが、皆がどの方向に向かってやっていくのかという目標値が、下田地域、三条地域としての総合的にどちらに向かっていくのかというところが、何回セミナーに参加しても、講師が入っていても、正直あまり定まってない。皆が何をしたらよいのか分からない状態になっている。

コンテンツ創出に関しては、各社やる気のあるところが、自分たちのところで行っていて、今回であると確か10万円くらいの補助があるという内容で、それを活用してやっているところが多いと思う。そもそもプレイヤーが少ないというのもあるが、何をしたらよいのかということが、もう開通まで3年という短い時間の中で取りまとめていかないといけない。

これは、市とか現地プレイヤーも含めて総意が固まらないと、ストロー化していく、観光地がたくさんある弥彦などに抜けて終わりになってしまう。私の経験として、いろいろな地域をみてきたが、地域一丸となって同じ方向性を向いている地域が強い。

コンテンツとしても、スノーピークに立ち寄って終わりではなく、各事業者が同じ方向性を向いて、複数の面で戦えるような地域になっていかなければならない。C評価ということとは、正直、セミナーに入っている方も、もう少し実力がある方に代えた方がよいのではないかと。辛口な意見かもしれないが、少しそう思っている。これが1点目である。

(片野経済部長)

観光面での八十里越の件は、竹内委員の御指摘のとおりであると我々も思っている。開通時期が、令和8年秋から令和9年夏になると国から示されているが、だいぶ近づいてきている状況の中で、この資料にある個々の商品開発は、実績という意味では手応えはある。

その一方で、今後開発する商品、あるいはもともとある観光資源、コンテンツ、商品をどのように生かして、活性化させて、寺泊などの観光地に通り抜けられることがないように、しっかりと囲い込むような取組が大事になってくると認識している。

そういう意味では、プレイヤーの皆様が非常に大事であり、我々としてはセミナーのメンバーの中から、私が申し上げた課題認識について、同じような立ち位置に立って俯瞰で全体を捉えた中で、どのようにやっていけばよいのかというところを一緒に考えていただけるキーマン的な方を探すということも必要になってくると思っている。

場合によっては、外部から専門的な方をお呼びするようなことも含めて、しっかり

と進めることができるように、これから取り組んでいきたい。引き続き御協力いただきたい。

(竹内委員)

続けて農業についてであるが、私は農業を商売としている。「第2章 持続可能で個性的な地域産業の振興」の「第2節 農林業の振興」の全体に当たるが、今この中に出ているのは、果樹と米という品目である。

農業は、果樹と米以外の野菜であったり、きのこであったりと様々な品目がある。大島地区は、果樹が有名で産地として名前が出てきており、米としては、新潟県全体で出てきているが、やはり、野菜というところが三条市は、とても弱い。野菜は、果樹と比べてとても単価が安いので、なかなか商売として食べていくことが大変な状況である。下田米に関しては、地域ブランドを立ち上げ、直接販売により代理店等々を通さず利益率の改善を図っているように、野菜部門にも、もう少し目を向けていただきたい。

例を挙げると、県内では魚沼地域には八色ブランドがあり、八色スイカ、八色しいたけに関しては、アクシアルグループ原信、ウオロク、イオンで販売されている。向こうの農家とは知り合いで、年収は、600万とか1,000万とか超えてくると聞いた。三条市内できのこは、私ぐらいしか届出を出してやっている人はいないかと思うが、生産地として認知されて、地域ブランドとして、下田米だけでなく、野菜部門についても地域と連携をとりながらやっていければと思う。

収益化できている農家というのは、2種類いて、1種類目が、これは言葉が悪いが、大規模農家で外国人労働者をどんどん入れ、自分はフェラーリとか乗っているけれど、ハウスには汗水垂らして働いている外国人がいるという、少し問題になっているタイプである。

もう一つは、スター農家であったり指名買いであったりができるタイプである。指名買いというのは、個人の場合であったり、地域ブランドの場合であったり、自社ブランドの場合である。一つ目のパターンは、あまり気持ちの良いものではないので、地域が連携して下田米のように生産地をつくり、同じような農作物の作付方法で地域としての野菜の販売強化といったところを、三条市としてお力を貸していただけないか。

資料にあるように、ただ米市場拡大推進協議会の「新規参画者の獲得に向けた取組を行ったものの、地域の農業者の加入を増やすことができなかった。」というのは、もともと農業が稼げないから誰もやらないという状況だからである。私は、農業がやりたくて稼ぎたいからやっているが、稼げないと続けられない。もっと農業をやりたい人たち、地域おこし協力隊の中にも、農業をやりたいと言っている子たちはいる。

定住に向けても、3年後、5年後、10年後、農業を法人化して通年雇用できるような会社を創出するために、市と連携をさせていただくところは、野菜部門でもとても必要になってくると思うので、私からは要望を含めた質問になる。

(片野経済部長)

野菜の件は、前回の協議会后に長谷川委員からも、果樹や米だけではなくて、野菜のブランド化への取組について御意見をいただいた。資料No.3の1ページに、それに係る見解をひとまずお示ししている。現時点では、ブランド化に関しては、取り組んでいないが、あくまで現時点ではということである。

果樹や米と比べて、野菜を排除するというのでは全くない。今後、そうした可能性がある野菜、例えば、委員御指摘のきのこであったり、石上・栗林地区のキャベツも承知している。そういったブランド化の可能性があるような野菜があれば、我々としては、もちろん排除することなく、取り組んでいらっしゃる皆様と検討を進めることはあってもよいと思っている。

収益性に関しても、現在、竹内委員からも中山間地農業の取組を進めていただいていると思うが、正に地域おこし協力隊や、若手の方を中心にそうした収益性のある取組への積極的なチャレンジが行われていることは、市としても心強く感じており、成果を出していただきたいと思っている。引き続き、こちらについても御協力いただきたい。

(兼古副会長)

農業の件について一言申し上げたい。一つの成功事例で、工場の祭典というものがある。個々の企業が、自分の商品をブランド化したという非常に良い事例である。ネットもあるので、三条のメーカーだけでなく商店も、ホームページやいろいろな形で情報発信ができる。工場内の見学ツアーをネットで募集して、県外から、かなり遠いところから来て見てもらって、そこで商品を買うという時代になってきた。

八十里越は、バスで行ったが、あそこは停まる場所がない。中間に停まる場所もないので、結局、売る場所は、道の駅ぐらいしかない。道の駅漢学の里しただがあるので、地域の野菜は、結構売れると思う。そこで、八色に匹敵するようなブランドをつくって、常に新しい商品売るとか、時季に合わせた商品売るとか。

農家の方が何軒かで、道端に販売所をつくっていらっしゃると思うが、それをもっと大きくしてやるとか、1社では到底難しいと思うが、何等かの工夫で、経済部の方も成功事例を参考にしながら、業界というか、その地域をまとめるというような、そういった新しい動きをしたらどうかと思う。

何しろ、燕三条ブランドというイメージが大変大きくなって、この大きな力をネットで情報発信し、限定した時期に、お客さんを市外・県外から来ていただくというア

ピールをして、そこで直接やりとりをする。要するに、中間の物流を省いて、その時期は直販する。直販は、刃物関係が特に成功している。以前に比べても、かなり客単価が上がって、その流れで、地場産センターの客単価は、かなり上がってきている。材料費も上がったが、それ以上の値上げで過去最高の売上となっている。

つまり、道の駅や地場産センター、そういうところと連携し、個々の企業も情報発信する。そういう動きがないと、プレイヤーが少ないといわれているが、八十里越はプレイヤーがほとんどいないわけで、その両端でうまく、こういった人が動かなかった時期に、人が動くチャンスがある。何とかビジネスチャンスをものにしていただきたい。三条商工会と商工会議所はいつも連携していて、毎年、経済部と一緒に、交互に只見と三条の両方でイベントをやっているのです、そこにも是非参加していただけたらと思う。

(宍戸会長)

オンライン参加の溝口委員からの御意見を代読する。

「第1章 子どもが健やかに育つ環境づくり」の「第1節 教育環境の充実」の小項目3の成果指標にある時間外勤務ひと月45時間超の教職員の割合について、令和6年度実績が目標値を超過達成していることは、喜ばしいことである。令和7年度の目標値すら達成済みの状況であるため、是非今後の目標値を引き上げて、より早いペースで働く環境改善を進めていっていただきたいと思う。

(宍戸会長)

続けて、オンライン参加の石塚千賀子委員からの御意見を代読する。

交流人口の拡大のための情報共有に関する意見である。先ほど、八十里越の話が出たが、「聞いたことはあるけど何だっけ。」といったように、どのような良いことがあるのかが知られていない。

交流人口の拡大の施策としては、「見てみたい。」、そして「映ってアップしたい。」そして「行ってみよう。」となるように、八十里越のフォトジェニックなシーンをもっと訴求されてもよいかと思う。大地の芸術祭のような代表的なシーンをアイコンックに使用することも検討されてはどうか。

(長尾委員)

私も八十里越のファンでバスツアーも参加したことがあり、今年は、只見にも行ってきて向こうの期待値も高いなということを改めて実感した。福島県からのお客さんということもあるが、面として考えて、向こうと連携しながら、より広い海外の方もひっくるめた形で、お客さんを獲得していただきたいという思いがある。

質問とコメントであるが、DXと外国人の受入れに関して、皆が二の足を踏んでいる中で、こういった相談体制の整備を構築されているということは、評価できるなと思

った。成功事例をつくって共有を図っていただけたらと思う。

外国人の受入れについては、雇用先の啓発ということも大事であるが、外国人の方々が、地域で生活していくというところで、寛容な地域づくりを目指していく必要があると思う。多文化共生の意識醸成の取組については、浸透状況がいかななものかというところをお尋ねしたい。

(片野経済部長)

外国人の受入れに関して、この地域においても、徐々に各企業にその必要性があるということは、かなり浸透してきていると感じている。所管課の商工課でも、受入れのためのセミナーなど、具体的な支援制度を用意している。

一方で、御指摘のとおり、仕事をする現場、職場については、各企業の雇用主が中心となってしっかりと環境を整える必要があるが、仕事以外のプライベートな部分、日常生活も含めて、外国人の方が働きやすいような地域づくり、環境づくりをセットで考えなければならないと思っている。

行政として、例えば、多言語で様々な情報を提供する取組は、既にやっているところもある。ただ、やはり日常生活のいろいろな場面で、様々な悩みとかお困りごとは多々あるかと思う。そこについては、行政が縦割りで仕事をしていると、課題解決が難しいと個人的には思っている。寛容な地域づくりは、地域住民の方々との融和が必要であり、御理解いただけるように、行政として横の連携をとりながら、どういった働き掛けができるのか市民部と経済部と連携する中で検討を進めないといけないと思っている。

(長谷川市民部長)

市民部は、地域住民を始め、広く、外国人も含めた様々な方が、多様な文化を寛容に受け止め、皆様が幸せに暮らせるような三条市を目指しているところである。

その中で、市民と外国の方との交流を考えており、今年度、まだスタートしたところではあるが、市民と外国の方がスポーツを通じて交流するというようなことを始め、来年度以降も交流しながら、より良い地域を目指せるような施策を考えていきたいと思っている。

(長尾委員)

是非、横串を通した形で進めていただきたいと思うし、だんだんと地域によっては受け入れていくように、非常に多様な国籍だとは思いますが、文化の方をセグメンテーションして、「こういった文化を背負った方たちがいらっしゃる。」というところで、郷に入ったら郷に従えではなくて、受入れる国の人たちの文化ということも市民に伝えていくという活動も多くなってきたので、そういったことも進めていただければと思う。

(佐々木委員)

2点お伺いしたいことがある。1点目は、資料No.1の1ページ、「第1章 子どもが健やかに育つ環境づくり」の「第1節 教育環境の充実」の小項目2のQ-Uにおける学校生活満足群の割合が、全学校平均でこの数字になっている。実際のWEBQUでの満足度は、恐らく、各校バラバラに数字が出てくるわけで、その分布とか、あるいはあるレベル以上の割合とか、そういったものがどの程度把握されているのかということが少し気になった。

平均値だけで出ていると、極端に低い値がアンケート結果にあると平均が下がるので、そういうことが原因で下がっているのか、あるいは全体的に低くなっているのか、それによって対策は変わってくる。その辺のところを、どれくらい詳しく把握されているのかというところを、教えていただきたい。

(平岡教育部長)

成果指標では、Q-Uにおける学校生活満足群の割合の全学校平均をお示ししているところである。Q-Uは、非常に信頼度が高いありがたいシステムであると捉えていて、実施した結果が出次第、内容を分析して、学校への対応を図っているところである。

学校生活満足群がどれくらいの分布を示しているのか、私共が分析する際の分け方、定義付けとしては、小学校1年生はどうかとか、中学校3年生はどうかとか、まずは各学年で大きくそれぞれの割合を示す。どの学年層が、例えば、小学校から中学校へあがるときに、どういう心理状況なのかとか、これに対し学級への働き掛けはどういうものが必要かということを考えるため、全体としては、そのように学年ごとの分析を行っている。学校ごと、学級ごと、さらには個人の指標としても使えるもので、分析結果に応じて、それぞれの学校で取組を展開している。

(佐々木委員)

詳細な分析は、学校ごとに出ている数字とかは、恐らくここでは出せないとは思いますが、そういった詳細な数字で対策の仕方は、分かってくると思うので、引き続き、詳細な把握等、対策をお願いできればと思う。

2点目は、資料No.1の11ページ、「第5章 住み良い地域づくり」の「第1節 生活環境の整備」の小項目6のところである。成果指標のすまい快適断熱リフォーム補助金の補助件数は、C評価になっているが、先ほどの説明の中で、国との補助金の併用ができずに一定数が国の補助金に流れているという説明があった。国の補助金に流れているというか、国の補助金を利用されている件数は、把握されているか。もし、把握されているようであれば、何件くらいということも可能であればお聞かせ願いたい。

(三巻建設部長)

国の補助金を使っている件数は、把握していない。国の補助金は、断熱性が非常に高い部分に対して、高額な補助金が出る。私共のリフォーム補助金は、そこまでお金が掛からない、二重サッシにするとか、簡易なものを、市で補填しカバーしようということで、この補助金を設けた。

国の補助金に一定数流れているということは、認識しているが、件数というところまでは押さえていない。

(佐々木委員)

国の補助金なので、国から情報を提供してもらえるのかどうかというところは、分からないところがあるが、できるだけ把握していただいた方が、そもそもの目標値の設定のところ、その辺は掛かってくると思うので、可能な限り情報収集等をしていただけるとありがたいと思った。

(高波委員)

2点ある。先ほど学力の話が出たが、声を大にして言いたいことがある。小学校6年生の英語のレベルと中学校1年生の英語のレベルの違いについてである。私には、小学校6年生と中学校1年生の子どもがいる。小学校6年生の子どもに、中学校1年生の英語の教科書の最初のページを見せたところ、「え、無理。」と言っていた。中学校1年生の子どもに、「周りの子どもたちは、英語のレベルが急に上がってついていけているのか。」と聞いたところ、「皆が困っているよ。」と言っていた。

ママ友に聞いたら、「英語は困っている。」と言っていた。困っていない人は、「塾に通わせ英語を勉強させた。」と言っていた。小学生の子どもがいるママ友に会ったら、「英語レベルがやばいよ。ギャップがひどいよ。」と言ったところ、「知らなかった。」と言う。これは、文部科学省が悪いとは思っているが、それはついていけないと思うくらいの、ひどいギャップだと思っている。

さいたま市では、英語教育に力を入れ、これが功を奏して、子育て世代の人口が増えていっていると聞いたことがある。予算を使って英語教育を市でやるのかということ、三条市の雰囲気はどのようなものなのか。そもそも英語ギャップを知らない保護者が多数いるというこの現状を何とかしたいと思っている。これは意見とか要望とかではなく、誰か良いアイデアはないかと思っている。

(平岡教育部長)

御指摘のとおり、小学校6年生と中学校1年生で教えることのギャップというのは、現に存在している。そうした意味からも、三条市においては、小中一貫教育カリキュラムというものを組み、小学校から中学校へのなめらかな進級というものを、これまでも取り組んでいるところである。

他方、文部科学省と御指摘いただいたとおり、国から示される学習指導要領という

ものがある。これを基本にしていかなければならないという中で、小中一貫教育カリキュラムというものを組んで進めているところであって、引き続き、学校と共に研究し、こうしたお声がないように、なめらかに進級できるように取り組んでまいりたいと考えている。

(高波委員)

2点目は、学校や子育て支援に関することである。学校に対する不信感とか、支援員に対する不信感が、三条市への不信感になっている。三条市が「子育てしにくいまち」のイメージになっているのではないのかという経験をしたのでお話をさせていただきたい。

大前提として、子どもたちのために、すごく頑張ってくださっている先生方や支援員の方がいらっしゃって、心から感謝している。今年の9月に、加茂市で子育てに関する講演会、パネルディスカッションがあった。加茂市の市長がパネルディスカッションに参加されていたが、三条市在住の一人の保護者の方が意見をされた。その内容は、子育てに関して学校に相談に行ったときに、ものすごく冷たい対応をされたという話であった。具体的な話をされて、最後におっしゃっていたことは、「三条市は相談するところはあるけれど、相談に行ったところで、もう別に期待はできない。不信感がある。」というように、悲しみと怒りを感じていらっしゃった。

注目すべき点は、頷いている三条市在住の方が、15から20人くらい居たことである。講演会の最初に、三条市在住の方は挙手したので、だいたい20人くらいいらっしゃったと思う。全体が50から60人だったと思う。それだけの方が頷いていたことが、すごくショックであった。

学校への不満とか、支援員への不満は、三条市への不満になっているような話をママ友からも、講演会で出会った方たちからも聞く。せっかくスクールカウンセラーがいるので、研修等をしていただけるとすぐ変わるのではないかと思う。子育て支援の一環として、良い教育現場をつくる一環として、学校の先生たちの研修とか、育成をしていただきたいと思います。三条市は、先生方の健康を守るために、働き方改革をしてくださっているが、これは一人の母親として非常に感謝しており、継続していつていただきたいと思います。長期的視点で考えれば、学校の先生の働き方改革をして、時間的余裕のある生活をしてもらったりして、学校の先生の支援をしていただくことで、それが将来、学校の先生になりたいと思う子どもたちを増やすことにもなると思う。学校の先生たちの子どもたちへの対応を良くするという指導、育成をお願いしたい。

(平岡教育部長)

学校においても、子育て関連機関においても、相談対応をさせていただいている。その中で、こちらにそのつもりがなくても、どうしても伝わり方として不快な思いを

与えてしまったというケースはある。こうした誤解や行き違いを無くしていきたいという思いであるが、なかなか無くならないというのが現実である。

そういったことも踏まえて、御指摘があったように、そうしたトラブルが起きたときには、ケース会議ではないが、各学校で、学校教育課を中心に指導を行っており、引き続き、注力してまいりたいと考えている。

大変御不快な思いをさせてしまっていたとしたら、大変失礼した。

(高波委員)

本当に心から感謝している先生もいらっしゃるが、そうでない先生もいらっしゃる。校長先生に話すだけで学校全体が変わるという経験をしたので、三条市全体でしてもらえたらと思う。良い方向に変わるのではないかと思うので、是非期待したい。

(宍戸会長)

開始から1時間30分が経つが、事務局においては、家に帰って気付いたことの照会は、資料No.3のような照会は、今回は用意されるか。

(石塚政策推進課長)

そういったお声が皆様からあれば、御用意させていただきたいと考えている。

(宍戸会長)

特段無ければ、個別に御連絡していただくということになるが、この場で意見を述べておきたいことや尋ねておきたいといったことは、御発言願いたい。

(長谷川委員)

資料No.2の17から18ページで、質問と意見がある。三条市看護師等就業・移住支援金を活用し看護師の確保を図ったが、今回なかなか人数が少なかったというところで、その理由は、資料No.3で平澤委員からの質問に対しての答えがあり、私もそれを見て、「そうだな。」と思った。質問は、三条市内の医療機関の看護師は、今現在十分に足りているか。

(村上福祉保健部長)

今現在、看護師が不足して医療行為ができないというような話は、今のところは聞いていない。ただ、これから医療ニーズが、介護ニーズも含めて、非常に大きくなっていくため、医療・介護の人材確保、医師、看護師、介護職員等々も含めて、そういった職員が不足して、従事者が不足して、立ち行かなくなるということは避けようと、今、検討を行っているところである。今のところは、支障は出ていないと捉えている。

(長谷川委員)

どうしてこのような質問をしたのかというと、私は以前高校の教師で、教え子たちの中には看護師になっている子がいる。去年少し会ったが、「夜勤明けで疲れた。」と

言っていた。今は基幹病院に勤めている。あまり変わってないようである。市では、三条市看護師等就業・移住支援金を用意していることは、これは良いとは思いますが、なかなか人数が集まらないということ考えた場合に、あくまでも移住支援策の一つとして行われているため、移住支援という枠を取っ払った新しい取組もしてもよいのではないかと思っている。

つまり、三条市外の方が、三条市内の医療機関、病院に就業したり、就業する予定であったりする方がいた場合は、その方に就業支援金として、例えば、10万円とか20万円を支給するので、是非、三条市の医療機関に勤めてくださいというようなことをすることもよいのではないかと思う。

今、不足はないと回答されたが、実際に働いている看護師は大変そうである。介護士もそうであるが、結局のところは足りない。忙しくて大変だと言っている。少しでも看護師の数を、三条市の医療機関に確保したいということであれば、移住にこだわらずに、三条市によく来てくださいましたというような感じで、支援金を支払うというような取組、制度を設けても、今後のことを考えたらよいのではないかと思うが、いかがか。

(村上福祉保健部長)

医療従事者に移住に関わらず支援金をという話であるが、今は本当に各業種において、いろいろな状況で人材不足というものが進んでいる。もちろん、私の立場からとすれば、医療・介護の従事者のところに重きを置きたいというところであるが、その辺は、各業種の人材の状況を踏まえ、全体の在り方を市として考えていかなければいけないと思っている。

その上で、特定の業種、例えば医療などについて、人材は足りているけれども従事者が非常に大変な状況だというようなことがあれば、今の御意見も踏まえて、考えていかなければならないと思っている。

(宍戸会長)

オンライン参加の平澤委員からの御意見を代読する。

人材確保について、外国人の確保に加え、教育訓練給付金等を活用したりカレント教育による社会人、市民の人材育成も重要かと思う。

(宍戸会長)

関係する部長には、特に人材確保、就業者の人員確保というところで、御意見として賜っていただきたいと思う。

時間の関係もあるため、他に無いようであれば、この場で意見を承ったこととした。市当局においては、本日委員の皆様からお寄せいただいた御意見を踏まえ、総合計画に掲げる施策や事業の着実な推進に向け、取り組んでいただくようお願いしたい。

(2) その他

(宍戸会長)

その他、事務局から何かあるか。

(石塚政策推進課長)

なし。

3 閉会（午後3時45分）